

火星

平成二十六年三月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

内陣の余寒覗きし鼻梁かな

淡雪の昼を閉ざせるてつちり屋

マネキンの素つ首あたり春遅し

白梅に息わきまへて立ちゐたり

地虫出でつつかひ棒の倒れたる

神鏡の巽向きある鳥の恋

李花くぐる男の印伝袋かな

草餅や山高からず低からず

遠雷にあをむ鱧の一夜干し

いそぎんちやく見てきし夜の羽根枕

太白星

山の湯に雲湧いて冬来たりけり
寒鯛の跳ねる箱より糶られけり
糶の声高まり河豚の箱がとぶ
東山の影の中なるかいつぶり
朝市を手早くたたむ時雨寒
小春日の足湯に誰も居ぬ時刻
湯の街の裏道冬の月上る

杉浦典子

浜口高子

舟底を擦つて揚げけり夕時雨
大鯉の盥に過ぎし嵯峨しぐれ
奥嵯峨の山河に跳ねし初諸子
ぽつぺんをいくたび吹けどぽつぺんや
山影の重しと発てる浮寝鳥
新年号の發送終へし茶の熱き
年惜しむ掬うてもまた鍋に泡

火星作品

山尾玉藻選

赤銅に遠峯かがよふ寒卵
八幡坂口夫佐子

冬の蠅青き軌跡を残しけり
曆売の鼻のあたりを素通りす
毛糸編む十指の聞ける山の雨
しぐれ来て福神漬のまつ赤なる
みちのくの空ゆるがざり冬の鳶
雪暗や防風の松まばらなる
宝塚小林成子

オーバーコート遠つ祖の土握りたる
冬の虹男うなづき合ひにけり
割烹着干しある蔵王嵐かな
肩上げの子に鴛鴦の寄りきたる
蘭定かず子

枯れ尽くしゐる山の香へ近づきぬ
地下街に新たな通りクリスマス

鯉老いて人を窺ふ風邪心地
沢音の石にひよどり松迎
梟やおとろへゐたる糸切り歯
息吹いて息の親しむ玉子酒
出涸らしの茶に雪暗のつりけり
足焙り射止めそこねし猪のこと
吹かれ飛ぶ紙の白さや十二月
人参葉刻み齢を重ねきし
寒鯉のつ字跳ねたる金盃
荃石のすわり落ち着く暮色かな
嵐山の影に舟着く日短か
初雪の闇のぬくとき素足かな
寒鯉の息を覗ける紙ン袋
半月の白に昏れきし事始
九条葱畑に影すがスタク
根のものをとうべ天皇誕生日
父許の梁きしむ葉喰

八幡大山文子

山本耀子

山田美恵子

選のあとに

山尾 玉藻

冬の蠅 青き軌跡を残しけり 坂口夫佐子

「冬の蠅」が思いがけず眼前を飛んだ。弱弱しい飛びぶりにスローモーションを見るような印象を覚えたのだろう。

「青き軌跡」とはその時の翳りある残像を捉えた感覚的表現である。同時発表作〈曆売の鼻のあたりを素通りす〉の「鼻のあたり」が言い得て妙。暇を持って余し座り込んでいる曆売の無聊の鼻先が窺える。

オーバーコート遠つ祖の土握りたる 小林 成子

一読、何の脈絡もなくこのコートの人物と「風と共に去りぬ」の終章のスカートレットオハラ姿が重なった。スカートレットは「Tomorrow is another day」ときっぱり言い切ったが、この人物も故郷の土を握りしめ静かな昂ぶりを感じている様子である。私小説的な世界が匂う。

肩上げの子に鴛鴦の寄りきたる 蘭定かず子

肩上げの着物の子は七五三詣の帰りであろうか。水辺の愛らしい着物姿の子に華やかないさよりの鴛鴦が寄って来たのは全くの偶然である。だが作者には自ずと必然的一景をなしているように思え、なんの気負いもなく一句に掬い取った。穏やかな祝祭性がこころに染みる。

息吹いて息の親しむ玉子酒 山田美恵子

熱々の玉子酒を冷まそうと何度か息を吹きかけている内に、自分の吹く息の音がいかにも楽しそうなのに気付いたのであろう。「息の親しむ」のあつたかかような含みある言い回しが玉子酒には似つかわしい。

嵐山の影に舟着く日短か 山本 耀子

亀岡から乗る保津川下りの船は嵐峽の渡月橋の手前が終点となる。冬の夕暮、嵐山の濃い影の中に下船するのはさぞ肌寒いことだろう。まして賑々しく下ってきた遊船であつただけに寒々しさは殊更であろう。

寒鯉の息を覗ける紙ン袋 大山 文子

池から揚げられた鯉がぶ厚い紙袋に放り込まれた。「息を覗ける」とは、紙袋を受け取った人物がどれどれと鯉を覗き込んだ様子を述べたもの。この措辞から鯉が口を開けて喘ぐ様子や、驚いて大きな眼を見開く様子が手に取るように想像できる。

しぐるるや芭蕉の國の銀座にゐ 深澤 鱻

俳人憧れの地伊賀上野にも無粋な銀座と銘うつ通りがあるのだ。通りに佇みなにやらしっくりとしない気分の作者だったが、偶さかの時雨に漸くこころ足る思いとなつたのだろう。古くから無常感や定めなき世を象徴する「時雨」は詠み人の美意識をくすぐる。まして芭蕉と「時雨」は切り離すことはできない。(以下略)

恒星圈

奥田順子

挽ぎたての袖配られし納め句座
書き入れて余白たつぷり新曆
夫と子の狭間に爛の冷えにけり
着ぶくれが水口覗く池浚
年詰まる母の忌日の過ぎしより

伊勢きみこ

長田曄子

霜日和揚げられし鯉舟に満ち
手套買ふバーゲンセールすいてをり
温泉へ子との旅なり冬木の芽
鱒酒を熱しあつしと子の飲める
金澤の宿の盥に寒の鯉

顔見世や総見席の綺羅簪
初文楽手拭ひ撒きに総立ちす
神木に背を向け開く初神籤
とつおいつ頒け並べみる柚の山
藪さわぐ硝子障子の隙間風

大山文子

垣岡瑛子

公園に施錠の時間浮寝鳥
ユダの木と思ひしメタセコイア枯る
御詠歌のおりんの揃ふ夜の襖
行く年の七色灯す観覧車
冬鴟や障子明りの九体仏

コップ二つレンジに廻る雪催
日当れる刈田の中の墓一基
はちみつの瓶に固まる草城忌
ケールにひと雨ありし紅葉山
暮の秋鴉短かく鳴きかはす

獅子座

山尾玉藻推薦

中尾安一

西畑敦子

勢ひ立つ湯気を先づこね餅の杵
餅つきの子に替はりたる音らしく
放たれし鶏にこゑかけ餅配
餅配終へし風呂敷たたまれし

林 範 昭

雲くぐるをりをり明る寒の月
夜の更けてウイーンフィル聴く三日かな
せがまれてピーターパンを読初
連歌所に雀来てゐる初景色

今 澤 淑 子

蕪洗ふ音の奥嵯峨日和かな
冬霧を分けて誰かれ奥嵯峨野
高々と山茶花仰ぐ佳き日かな
大ぶりの蕪称へつつ丹波越

涼野海音

看護師の白き匂ひや年暮るる
点滴の音無き音や星亙つる
癌告知街に聖夜の灯の巡り
病室へ産声届く霜降る夜
マンデラの遺影を見つつ蜜柑剥く
玄関に金のなる木や年用意
俎に鮪の目玉寒波来る
ソファアの父の後ろを通る煤払

西村節子

柴漬やしばらく知らん振りをせむ
山門の横に去年の酸莖売
雪くるか大釜の辺に薪積まれ
風邪声の父が眼鏡を探しをり

福本郁子

狐火や平らかな巖濡れぬたる
山雲の流れてゆきし冬菜畑
いつせいに雀飛び込む枯むぐら
格子戸に魔除けのちまき十二月